

219-1953

日本組織培養学会

昭和63年1月20日

会員通信
第64号

発行責任者
許南浩(東大・医科研), 間中研一(獨協医大)
常盤孝義(岡山大・医), 大島浩(大阪歯大)
山下三千年(長崎大・医)
東京都港区白金台4-6-1 (〒108)
東京大学医科学研究所・癌細胞学研究部
電話(03) 443-8111 内線256

選挙公示

次期の日本組織培養学会会長ならびに幹事を選出するための選挙を実施するよう、会長から選挙管理委員を委託されました。

つきましては、日本組織培養学会細則にのっとり、次のように実施しますので、棄権なきよう、ご投票の程お願いします。

記

○選出役員

会長 1名

幹事 8名(40歳未満, 以上各4名)

○投票方法

無記名, 郵送による

(投票用紙, 被選挙人名簿, 宛先入封筒は同封されています)。

○投票締切

昭和63年2月10日(消印有効)



以上

選挙管理委員：蔵本博行, 宮崎正博

§ 幹事会議事録

日時：昭和62年11月9日(月) 13:00~19:30

場所：新潟厚生年金会館

出席者：佐藤二郎, 蔵本博行, 乾直道, 松村外志張, 加治和彦, 小野順子, 奥村秀夫,
許南浩, 間中研一, 宮崎正博

1. 会長挨拶

佐藤会長のご挨拶により定例幹事会が開会されました。

2. 昭和62年度 シンポジウム世話人挨拶

世話人代表の鈴木利光会員からご挨拶をいただく予定でしたが、ご都合が悪くご出席いただけませんでした。

代って、加治和彦世話人より下記のとおり実施される旨ご挨拶がありました。

記

テーマ： 神経系細胞の培養—— in vitro 機能発現と分化の誘導（8 演題）

日時： 昭和62年11月9日（月） 9:00 ~ 17:30

会場： 新潟大学医学部有壬記念館

会費： 無料（但し、懇親会費 3,000 円）

世話人： 鈴木利光（新潟大学），福田 潤（東京大学），加治和彦（都老人研）

今年度シンポジウムも昨年度のメイン・テーマ「in vitro および in vitro から」の主旨が反映できる様に機能面を中心に取り組む様配慮しています。神経系細胞は研究の target として大変意義深いものであります。現在この分野の研究の進展は目覚しく、間もなく神経系細胞に関する新しい journal も刊行される予定です。この時期に本シンポジウムを開催するのは good timing であると思われま

す。本シンポジウムの内容は機関誌「組織培養研究」第6巻2号（30～40 頁の頁を費す）に掲載されます。

幹事会のメンバーの方々にはできるだけ出席して積極的に討論していただきたいと思

3. 昭和63年度第61回大会世話人挨拶

世話人高木良三郎教授（大分医科大学）からご挨拶をいただく予定でしたが、ご都合が悪くご出席いただけませんでした。代って、小野幹事（大分医科大学）が高木世話人からのメッセージを披露しました。その内容は下記のとおりです。

記

日本組織培養学会幹事会 各位

本日は幹事会で第61回大会の御報告をすることが出来ず、大変申し訳なく思います。

第61回大会は予報の如く昭和63年5月19日（木）午後より5月21日（土）午前までの予定で大分市舟井町トキワ会館5階ホールにおいて開催いたします。暫定的スケジュールは下記のとおりでございます。

第61回大会内容予定

(1) 一般演題

(2) 招待講演①： Dr. David Barnes（オレゴン大学）

“ In vitro growth of mouse embryo cells without senescence ”

(3) 招待講演②： 池原征夫教授（福岡大・医・生化）

“ 膜蛋白質の存在様式に関する新しい視点 ”

(4) シンポジウム

“ 組織培養—— 臨床医学への還元 ”

(5) ワークショップ

“ セルバンク ” [I] セルバンク業務

[II] 新しい細胞株育種

(6) セッション・イン・デプス（session in depth）

“ 無血清培養 ” （growth factors も含め3時間程度）

実施の期日は、招待講演、シンポジウムが第2日の午後、ワークショップが第1日の夕方～夜、セッション・イン・デプスが第3日の午前に予定しています。一般講演は接した2会場を使用いたします。総会は第2日の午後1時より45分間の予定でございます。

大会に関する御意見を御申出頂ければ幸いです。

昭和62年11月7日(土)

第61回 大会世話人 高木 良三郎
大分医科大学 内科
TEL 0975(49)4411 内2790

4. 奨励賞の募集について

蔵本庶務幹事から下記のとおり経過説明がありました。本年は特例で過去3年間(60, 61, 62年度大会)を対象といたします。対象演題は計187題(一部重複-25名)あり、その内会員は99名、非会員は63名でした。下記の要領で発表者に応募依頼を発送(10月24日付)いたしました。

記

昭和62年10月24日

殿

日本組織培養学会奨励賞の募集について

日本組織培養学会では、昭和62年度の総会において、若手研究者の育成を目的とする学会奨励賞を授与することが決定されました。その選考規定は別紙の如くであります。

先生には、過去3年度内に筆頭者として本学会で発表しておられます。先生あるいは共同発表者で、選考規定に添った方がおられましたら、是非応募されますよう、ご案内申し上げます。

尚、今回は初回の特例として

(1) 昭和62年度 奨励賞(昭和60年度および同61年度に発表された方)

(2) 昭和63年度 奨励賞(昭和61年度および同62年度に発表された方)

の2年度にわたって募集致します。

〆切期限は双方とも昭和62年12月31日であります。

書類送付先：〒228 神奈川県相模原市北里1-15-1

北里大学医学部産婦人科内

日本組織培養学会庶務幹事 蔵本 博行 宛

TEL 0427-78-8414

庶務幹事：蔵本 博行、宮崎 正博

引き続き下記の討論および確認が行われました。

——— 受賞対象者について

- 本学会で研究発表した時点で非会員であっても奨励賞に応募する年の会計年度、つまり4月1日現在で会員であり且つ40歳未満であれば応募する資格のあることが確認されました。
- 今回だけ特例で昭和62年度と昭和63年度奨励賞を同時に選考することになっていますので、昭和61年度に研究発表した人は62年度および63年度のいずれにも応募できる(応募チャンスが2

回あり)ことを確認しました。

————— 選考基準について

- 奨励賞に値する仕事(研究)とはどの程度のものを云うかについて議論し、例えば外国の学術誌に受理されていることを最低条件としてはという具体的な意見もありましたが、実際に選考する過程で幹事会で決定すればよいことで、内容を充分検討して将来のびる可能性のあるものを選ぶ様になることになりました。
- 応募研究の大部分が国内で行われたものでなければならないという限定をつけるかという意見がありました。応募者は受理論文の筆頭者であることと選考規定に明記してあり、当該研究を主体的にやっていない人が筆頭で論文を書くことはできないとの判断によりその様な限定をつけないことになりました。

————— 選考方法について

- 審査員の専門分野から外れる研究を評価するのは困難であるので、この場合専門家に相談すべきではとの意見がありましたが、全ての研究分野が公平に評価される様に各分野の専門家である当該座長が選考に加わるので問題はないということで一致しました。
- 選考は幹事会で行うことになっているが、密室で合議決定されたというのは良くない。誰が見ても合理的に選考されたという印象をもつ様に行うべきであるという確認をしました。
- 選考は研究内容だけを評価するのではなく、学会活動内容も考慮してはどうかという意見がありましたが、結論には至りませんでした。
- 選考は具体的に下記の方法で行うことが決定しました。
 - (1) 各審査員(会長、幹事ならびに座長)が独自に応募研究の中から上位3件(1, 2, 3の順位をつけて)を選び各々に推薦理由(あるいはコメント)を添付して庶務幹事まで報告する。
 - (2) 庶務で集計し、その結果を各審査員へ報告する。
 - (3) 各審査員はこれに基づき再び上位3件(1, 2, 3位の順位をつけて)を選び庶務幹事に報告する。
 - (4) 庶務で集計し、幹事会に提出する。
 - (5) 幹事会で次分審議の上受賞者を決定する。

————— 推薦書の書式について

- 蔵本庶務幹事より書式の原案の提示があり、若干の修正の後、下記の書式に決定されました。

記

日本組織培養学会奨励賞〔 推 薦 書 〕(どちらか線で消す)
自己推薦書

日本組織培養学会会長 殿

下記の若手研究者を日本組織培養学会奨励賞に推薦致します。

氏 名:

生年月日:

(当該年4月1日現在の年令: 歳)

所 属:

(TEL)

本学会での発表：

年 月 日：

演 題 名：

発表者氏名：（全員記入のこと）

論 文 発 表：

論 文 名：

著者、題名、巻、号、頁、年：（全員記入のこと）

推 薦 理 由：

昭和 年 月 日

所属、現職

推薦者氏名

㊦

（自薦の場合は本人の所属、氏名）

5. 会計の改革案について

周知のとおり会計改革案（特別会計と一般会計の区分の明確化、予算項目の整備、財政不足分の明細、妥当な値上げ幅等を検討する）のためのワーキング・グループ（乾 直道、松村外志張、難波正義、小山秀機）が本年度幹事会、総会を経て正式に発足しました。乾委員（会計幹事）より、ワーキング・グループの会合が本年度日本癌学会総会（9月7日～9日、東京）の後にもたれ、具体的な改革案2件が出来上ったとの報告と提示がありました（別項を参照して下さい）。これに基づき下記の様な活発な討論が行われました。

- 改革案（その1）で提示されました問題点〔年2回の研究会が年1回の大会に変更され、また現在の様な財政難にもかかわらず改めて秋のシンポジウムを毎年開催する必要があるかどうか〕に対し、秋季シンポジウムはあくまで本学会の活性化のために開催されるものであり（幹事会の決定事項）、また本学会会則に違反するものではないとの確認をしました。
- 秋季シンポジウム開催の有無はその時の会長および幹事会に一任することになっていたので、次の会長・幹事会で引継がれるかどうかは解らないが、できるだけ継承される様働きかけることを確認しました。
- 研究誌2号の発行費、秋季シンポジウム開催費ならびに広告収入の収支の差額は従来第2回目（秋季）の研究会開催費に相当するので、研究誌2号の発行および秋季シンポジウムは中止すべきである。また改革案（その1）と（その2）の差は秋季シンポジウムを開催し研究誌2号を発行するか否かによるのではとの意見がありました。しかし研究誌2号の発行を廃止すれば学会としての研究活動の沈滞を来たしひいては日本学術会議会員としての資格にも影響を及ぼすことも考えられるので廃止しないことを確認しました。
- 特別会計と一般会計の区分について、広告収入は特別会計から一般会計へ移すことを確認しました。出版収益、フィルム収益、ディスパーゼ収益等は特定の会員の努力によるものであるから従来どおり特別会計へ入れることを確認しました。
- 項目の整備に関しては、業務委託費が研究誌2号、会員通信等の発送費を含んでいましたが、今

後これらを別項目として業務委託費は純粋に学会事務センターへ支払われる金額とすることが決定されました。また雑費（幹事会、慶弔費等）を運営費と改めることになりました。

◎財政不足分と妥当な値上げ幅に関して、研究誌2号の発行およびシンポジウム開催を続行することの確認の上、約70万円の不足が算出され年会費を1,000円値上げすることに決定し総会にはかることにしました。これに伴い賛助会員費も現行1万円から2万円に値上げすることに決定しました。来年度総会で承認の後、賛助会員へ依頼することになりました。

———以上の討論の末、下記の一般会計改革案（修正案）がまとまりました。

昭和63年度 一般会計予算修正案

取 入		支 出	
	円		円
正会員会費	2,800 (¥4000×700)	研究誌№2発行費	1,500
賛助会員会費	1,300	会員通信発行費	450
入 会 金	50	大会補助金	500
広 告 収 入	1,000	新 企 画 費	300
		IACC加盟費	250
		同 事 務 費	200
		業 務 委 託 費	450 (¥618×700)
		研究誌発送費	170
		事 務 通 信 費	510 (含む会員通信発送費・¥357)
		会員名簿作製費	280 (700×¥400)
		運 営 費	300
		予 備 費	200
		繰 越 金	40
合 計	5,150	合 計	5,150

6. 組織培養研究の改革案について

周知のとおり、本学会の機関誌である組織培養研究の改革（原著論文を掲載する場合の投稿規定、原稿審査の方法、発行回数、経費等を検討する）のためのワーキング・グループ（渡辺正己、許南浩、間中研一、宮崎正博）が本年度幹事会および総会を経て正式に発足しました。

ワーキング・グループ代表の渡辺委員（編集幹事）が経過説明を行う予定でしたが、生憎アメリカ出張のためできませんでした。代って宮崎委員（庶務幹事）から、ワーキング・グループ発足後個々に電話連絡等を行いました。残念ながら4人による検討会を開催するまでには至りませんでしたとの経過説明がありました。続いて渡辺委員が第1回検討会に提案するべく用意されていた改正方針案案（下記参照）に基づいて議論いたしました。

記

組織培養学会誌“組織培養研究”の改正方針について

渡 辺 正 己

組織培養研究の改正について、先の幹事会でワーキング・グループで検討することとなったが、諸般の理由によってこれまで検討会を開催できなかつた。理由として、かなりの会員の意見を徴収する

過程で、学会の中心的会員のなかに組織培養研究の発行自身にかなり根強い反対意見があることに気付いたのが理由の一つである。改正ではなく廃止が議論されるのならば、あえてこの時期に改正案の検討を急ぐのは得策ではない。従って、今回、ワーキング・グループとしての統一見解を提出することはできないが、私が第1回検討会に提出するべく用意していた改正方針についてご説明したい。

(1) 改正案提出の時期

まず、学会の活動方針は、学会をどのように運営し発展させてゆくかという基本的理念がはっきりすることによって自ずから決定されると思う。その学会活動に運営費が必須であればなおさらである。こうした意味から、さきに述べたように、学会の中心的会員のなかに組織培養研究の発行にかなり根強い反対意見があることを考慮すれば、組織培養学会の運営費の40%近くにあたる組織培養研究の発行の是非はかなり慎重に議論せねばならない問題であると思う。従って、学会の会計問題を慎重に審議している現在、その推移を十分に汲み入れなければならない。従って、改正案を総会に提出するのは、会計問題が解決し学会誌の継続発行を確認したあとのほうが好ましいと思う。

(2) 編集委員会の発足

しかし、組織培養研究自身はかなり多くの問題を含んでいるので、発行廃止が決らず、現状で発行を続けるなら次の2点は早急に改良するべきである。その第一は、組織培養研究には編集方針をつくることである。編集方針の大筋は学会の活動方針によって左右されるものであるが、一度方針が決められたのちにはある程度の期間編集委員会に委ねられるべきものであろう。しかし、現状は2年毎に選挙される幹事の1~2名が編集幹事になり編集をするにすぎない。そのため、それぞれの編集幹事の個性で編集されている面がかなりをしめている。編集方針は継続されないし、されるべき方針がない。従って、早急に編集委員長と5~6名の編集委員を幹事会とは別に選び編集委員会を発足するべきであろう。この編集委員会委員の任期は、最低5年とし一度に改選せずこの編集委員会が中心になって着実な編集方針をつくり、編集方針が継続されるように努めるべきである。今回も、投稿論文を1編受け付けた。しかし、その審査規定等がなく大変に困った。しかし、編集幹事の独断で2名の学会員に審査をおねがいがしたが、2名の審査委員自身が組織培養研究の編集方針をたずねてこられた。

(3) 発行費

組織培養研究の発行にかかわる会計を、学会の正規会計に組み込み、幹事会がその執行に責任を持つ必要がある。現在は、編集費を広告収入で賄っているが、その是非について学会員の意見統一が計れず変則的な会計を行っていることは解せない。これでは編集幹事の負担が大きしいし編集方針にも影響がでる。私的には、発行費を広告収入で賄うことに何等問題はないと思うが、学会員のコンセンサスを必要とする。もし、今後も広告費で発行費を賄うのであればそのための努力は幹事会レベルで行うべきである。編集委員会は、学会が決めた発行費用でできる範囲の学会誌を発行するのが妥当である。

(4) 私的な組織培養研究の改正案

前3項の問題が解決されなければ、改正案をだすことじたいナンセンスであるが、私の私的な意見として“組織培養研究”は、発行を継続してゆくことに賛成である。

a. その発行の型としては、原著論文を載せることのできるジャーナルがいいが、決して一足飛び

である必要はないと思う。当初、2～3年は、総説、研究日より、技術速報、会員通信等を中心に編集を進めるとともに、次第に原著論文を受け付けるようにする。3～5年には、かなり原著論文が集まるようにする。たとえば、幹事は1年に1報投稿することとするのもいい考えである。幹事自身が投稿したくないようならば努力する価値がない。5年後には、確実な編集方針が固まったものにしたい。論文の内容は学会員によって審査し、もし英文であれば、ネイティブの英語国民に英語のチェックをしてもらう。もし、日本語であれば、必ず英語の要約をつける。

b. 年間の発行数は、4回程度まで増やす。それを実現するためには、雑誌の紙質を上質紙（現在はアート紙）にして経費を30%切り詰める。文部省の学会誌刊行援助を受ける（270万程度）。学会費が3,000円では発行は難しいので6,000円程度にあげる。それらがすべて実施できても、学会員が千名以上にならないと安定した継続発行は難しいので会員数の増加を計る。

c. 条件が整うまでは、総説を中心に編集し、学会のシンポジウムのプロシーディング的雑誌に終始しない。

d. これらを実現するためには、編集委員会をつくり編集部を幹事会から独立させ、発行経費を幹事会の責任で準備する。

以上である。ここに上げた意見のうち、(2)および(3)については幹事会で十分に議論していただき、次回の総会あるいは幹事選挙時に投票で会員の同意を得て頂きたいと思ってやまない。今回の幹事会に出席できず多少責任を感じておりますがどうぞ宜しくお願い致します。

◎組織培養研究の発行自体にかなり根強い反対意見があるという状況について、仮に廃止するとすれば本学会の研究活動が沈滞を来すと考えられるので廃止する余地は全くなく、むしろ発展させるべきであるという見解で一致しました。

◎研究誌を発展させるにあたって、特に第2号を充実させる努力を数年続けてやがては原著論文を掲載できる様な季刊誌へと発展させられれば良いのではという意見がありました。

◎第2号の発行費調達はこれまで編集幹事が行ってききましたが、今後は幹事会が行う方向で更に検討することになりました。

◎ワーキング・グループとしての改革案が纏まっていなかったため、今回の幹事会では何ら結論的なことは得られませんでした。研究誌2号について、現状維持なのか或いは原著論文を受けるか、その場合どのくらいの予算が見込まれるか、また編集委員会を設置するか等をワーキング・グループで早急に検討し、改革原案をまとめることが強く要請されました。

7. 役員を選出について

蔵本庶務幹事より、本年度（昭和62年度）は会長および幹事を選出を行う年度に当っており、1988年度版会員名簿作成のために必要な所属・住所の変更等を知らせて欲しい旨会員各位に依頼しましたとの報告がありました。尚、1988年度版名簿は本年内に出来上る予定です。

1) 選挙管理委員の委託

佐藤会長は、本学会細則第3章第4条第1項の規定に基づき庶務幹事蔵本博行および宮崎正博の2名を選挙管理委員に委託し、当人もこれを了承しました。尚、これに関連して、慣例により開票は本学会会員1名の立合のもとに2名の選挙管理委員が行うことを確認しました。

2) 選挙日程

種々検討の結果、1988年度版会員名簿、被選挙人名簿、ならびに会長・幹事選挙投票用紙を昭和63年1月20日までに発送し、投票ノ切を同年2月10日（消印有効）とすることが決定されました。

3) 会長候補の推薦

細則第3章第4条第3項に基き、幹事会は会長候補を推薦することができるが、現幹事会は推薦しないことに決定しました。

8. その他

1) 新入会員

新規入会希望者18名の入会が承認されました。

2) 組織培養用語辞典

松村編集委員より組織培養用語辞典編集の経過説明が下記のとおりありました。

編集委員各人の事情により発行が遅れています。この間に新しい用語も出ており、これらもできるだけ収録する様にしたい。また通産省工業技術院は本学会による用語集の編集・出版に強い関心を寄せており、同院からこのための fight money（30～40万円）の援助の申出がありました。編集委員会はこれをありがたく受け、同委員会の会合費や大学院生のアルバイト雇用費等に充ててできるだけ発行を急ぎたいので、幹事会としてこれを承認していただきたい。尚用語集発行時に謝辞を掲載したい。

幹事会は異議なくこれを承認しました。

3) Cell Bank

本学会宛にJCRB（Japanese Cancer Research Resources Bank、財団法人がん研究振興財団）からJTC株の寄託の依頼がありました。これに対し、佐藤会長から、本学会にはJTC株を維持・保存する機関がないので登録株を永久に維持・保存・分与されたい方は無条件または条件をつけて現在活動中のJCRBへ寄託されるよう提案がありました。幹事会はこれを了承しました。尚、折衝過程については佐藤会長に一任することになりました。

4) IACC委員および幹事選挙

松村会計幹事から、現在のIACC委員は会長指名により決定されましたが、今後は選挙により決定するようにして欲しいとの意見があるとの報告がありました。佐藤会長から、それも一つの方法であります。IACC設立の経過（会員通信参照）にありますように少なくとも今回のIACC加盟及びその委員選出は幹事会・総会を経て行われており、手順はふまれて来ましたので現在までの決定については御了承願いますとの答弁がありました。

本学会の規約・制度上の問題点として、本学会にも次期会長（president-elect）制度を導入してはどうかとの提案がありました。また現行の幹事選挙は全員改選方式をとっているが、全員改選では学会運営が大変なので半数改選方式を切替えてはどうかとの提案もあり、これらの問題については次期幹事会での検討事項として申送ることになりました。

以上

（蔵本博行、宮崎正博）

§ 会計ワーキング・グループからの報告

㈸日本たばこ・中研 乾 直 道

上記の如く昭和63年度の一般会計予算原案を、会計ワーキング・グループ(松村・小山・難波・乾)で作りました。海外学会活動を重視して、2,000円値上げ論も出ましたが、結局の所会費、賛助会費据置き案と、会費1,000円値上げ、賛助会費10,000円値上げの二案をまとめて幹事会に提出しました。昭和62年11月9日新潟で行なわれた幹事会で議論のうえ、原案(その2)で昭和63年度は運営して行きたいと言う強い希望が出ましたが、昭和63年度総会までに皆様の御検討をお待ちしております。御意見の御座居ます方は、会計幹事：乾までなるべく早く御意見をお寄せ下されば幸甚です。

次にこれらの予算原案に少し解説を加えますと、「その1」は脚注及び問題点にすでに記してある如く、新規企画としてのシンポジウム等を毎年は開かず「組織培養研究誌№2」を出さないで年会費は据置かれますが、ここ2年間の日本組織培養学会の活動が少し縮小されます。

「その2」については 1) 特別会計と一般会計の区分を明らかにし、経常的に入金される広告収入(額は一定ではありませんが)を特別会計から一般会計に移しました。 2) 一般会計の予算項目をやま細分しこれを明らかにしました。 3) 正会員費、賛助会費(値上げにより退会する分を含む)を、それぞれ1,000円、10,000円値上げしました。 4) 海外事業(IACC)費を正式に計上した、等が要点です。

なお、特別会計は上記原案で会の運営を行なって行く限り毎年20~30万の上積みになって行くのであえて原案は出さず、昭和62年予算案として計上する予定です。

昭和63年度 一般会計予算原案(その1)

収 入		支 出	
	千円		千円
正 会 員 会 費	2,100 (¥3,000×700)	会 員 通 信 発 行 費	450
賛 助 会 員 会 費	1,000	大 会 補 助 金	400
入 会 金	50	I A C C 加 盟 費	250
繰 越 金	32	同 事 務 費	200
	3,182	名 簿 発 行 費	280
		業 務 委 託 費	450
		事 務 通 信 費	510 会費通信費を含む
		運 営 費	300 幹事会費等
		予 備 費	342
			3,182

- 注 1 : シンポジウムは2年に1回とし名簿作成のない年とする。
 2 : シンポジウム補助金は特別会計でもよいかもしれない。
 3 : シンポジウムは補助金は出すが、その対象はパンフレットの発行代のみとする。
 4 : 一般会計費から研究誌№2の作製費は出さない。これの発行をとりやめる。
 5 : 正会員、賛助会員費は現状のまま据え置く。

上記予算書に対する基本的問題点

- 問題点 1 1回秋の研究会を中止したのに、改めて秋のシンポジウムを毎年開く必要があるかどうか？
- 2 ましてや、シンポジウム後、研究誌No.2を発行する必要があるか？
- 3 両者合わせて2百万7千円の予算をくみ実質、数10万円～100万円の赤字を会費値上げで解決してよいのか？

昭和63年度 一般会計予算原案(その2)

収 入		支 出	
	千円		千円
正会員会費	2,800 (¥4,000×700)	研究誌No.2発行費	1,500
賛助会員会費	1,300	会員通信発行費	450
入会金	50	大会補助金	500
広告収入	968	シンポジウム補助金	300
繰越金	32	IACC加盟費	250
	5,110	同 事務費	200
		業務委託費	450 (¥618×700)
		研究誌No.2発送費	170
		事務通信費	510 (含む会員通信発送費・¥357)
		会員名簿作製費	280
		雑 費	400
		予 備 費	100
			5,110

- 注 1 : この原案は会費1,000円値上げ、賛助会費10,000円値上げの案です。
- 2 : 研究誌発行の為、約100万円を広告収入に頼らなければならないかなり苦しい予算です。
- 3 : この際、会員数の増加等をお考え頂きたく存じます。
- 4 : 会員名簿の作製費を除けばなんとかやって行ける予算と思います。
- 5 : もし支出以外でIACC活動費が必要なら第3会計簿を作り学会会計幹事がこれを管理する事がよいと思います。

§ 第61回 大会についてのお知らせと演題申し込み

日本組織培養学会第61回大会を下記のごとく行います。

日 時 昭和63年5月19日(木)午後
5月20日(金)午前、午後
5月21日(土)午前

場 所 トキハ会館
〒870 大分市府内町1丁目137-3
TEL0975-38-3111

日 程

5月19日(木) 午後～夜

一般演題

ワークショップ「セルバンク」〔I〕セルバンク業務

〔II〕新しい細胞株育種

5月20日(金) 午前～午後

一般演題

招待講演(1) “膜蛋白質の存在様式に関する新しい視点”

池原征夫教授(福大, 医, 生化)

招待講演(2) “In vitro growth of mouse embryo cells without senescence”

Dr. David Barnes (Dept. Biochem. & Biophys., Oregon State Univ.)

シンポジウム “組織培養——臨床医学への還元”

夜 懇 親 会

5月21日(土) 午前

Session in Depth “無血清培養法の展開”

演題申し込み

最終ページの申し込み用紙を用いて2月29日(月)までにお申し込み下さい。折返し抄録用紙をお送りいたしますので3月26日(土)までにワードプロセッサ—またはタイプで作成の上ご返送下さい。なお、抄録用紙は昨年と同じ形式です。

交通について

東京—大分間の飛行機便についてのみ、三慶旅行事業部(〒190 東京都豊島区東池袋1-25-17, TEL 03-987-2631)に依頼されれば割引の特典があります。関東以北の会員の方には、追って(3月頃)三慶旅行事業部より直接にご案内がまいりますので各自お申し込み下さい。

宿泊について

会場のトキハ会館周辺には、比較的安い料金のホテルがございます。巻末に略図および料金表をあげておりますので各自お申し込み下さい。*印のホテルは会場にも近く学会協賛として学会出席

者には割引料金となっていますのでその旨お申し出の上お申し込み下さい。なお別府に宿泊される場合、会場まで3～40分を要します。

今後の予定

次回の会員通信で、最終的なスケジュールをお知らせします。本大会についてのご希望、お問い合わせは下記をお願いいたします。

第61回大会世話人

高本良三郎

〒879-56 大分県大分郡挾間町医大ヶ丘1丁目

大分医科大学内科第一

TEL 0975-49-4411(内2793, 2795)

§ 第2回 秋季シンポジウムをふりかえって

新潟大学医学部第一病理学教室 鈴木利光

1987年11月10日。はざ木のはざ間に夕陽の映える晩秋の新潟で第2回組織培養学会秋季シンポジウムが開催されました。場所は新潟大学医学部有壬記念館(因みに有壬とは詩経の小雅の一節、百禮既台、有壬有林からとられた言葉で、大意は、賓客を迎え、礼を守って盛大に和楽燕飲す、とのこと。一方、シンポジウムは周知の通りギリシア語の語源で、共に酒を飲むこと——酒宴——を意味します。したがって記念館は会場としてまさにうってつけの場でした。運よく晴天に恵まれ、北海道から鹿児島まで、出席者数は89名を数えました。

去る5月の総会で、今回の世話人の御一人の加治和彦氏から、秋のシンポジウムを頼むと言われて、すぐ福田潤先生に世話人の一人になっていただき、三人そろえば何とかなるだろうとスタートして6ヶ月。それ以来、心配していたのは当日の天候と参会者数でしたが、いずれもまあまあでしたのでホッとしました。

シンポジストは8名——うち学会員は2名——、少し欲張りすぎたかなと思いましたが、質疑も活発で、ゆとりをもって進行することができました。午前中から開会するのであれば、丁度よい演者数のように思われました。ただ、シンポジスト同志および世話人(座長)との打ち合わせが全くありませんでしたので、総合討論の進め方に問題を残したように感じました。

参加者89名の内訳は、大学・研究所から63名、企業から25名、個人1名でした。学会員、非学会員別の検討はしておりません。第1回シンポジウムでは学会員の参加が少ないことが問題点の一つとして挙げられておりました。しかし、将来性を考えますと、シンポジスト、参加者とも開かれたシンポジウムであってもよいのではないかと思います。

最後に運営の件、90名足らずの出席者とは言え、学会よりの補助のみで参加費無料のまま開催するのはなかなかの苦勞です。せめて1年前から決定していれば、学会開催の補助を申請できる制度が学内外にいくつかありましたので、その適用を受けられたかもしれません。今後はその辺の事情も勘案されて、シンポジウムの設定をされますことを幹事会にお願いしたいと思います。

終りに佐藤二郎会長をはじめ、幹事の諸先生方、また、加治・福田両世話人の方々の大変な御助力で、大過なくシンポジウムを終らせていただき、御礼申し上げます。また、岩永敏彦、畠中寛、赤川公朗、錫村明生、恩田清、杉本喜憲の諸学兄には、非学会員であられるにもかかわらず、シンポジストとして実に有意義な御講演を賜わり、心から深謝申し上げます。

以上、第2回秋季シンポジウムの世話人の一人として、雑駁ながら、感想の一端を述べさせていただきました。

白原の銀蛇と化しぬ信濃川

いよいよ本格的な冬の到来を前に。

1987年12月21日(月)

§ 日本組織培養学会シンポジウム 「神経系細胞の培養」に参加して

鹿児島大・医学部第一病理 小 浦 雅 敏

1987年11月10日新潟大学医学部有壬記念館で日本組織培養学会の第2回シンポジウムが「神経系細胞の培養— in vitro 機能発現と分化の誘導」のテーマで約100名の参加者で開催されました。今年は、大変暖かく車窓から見える谷川岳、苗場山等の上越の山々の山頂の北側斜面に雪が見られただけで、新潟市内では着ていったコートは全く不要でした。

近年のLife Scienceの研究の方向がNeuroscienceとDifferentiationにあるのは衆知の通りですが、その二つのトレンドを併せた今回の企画は将に時宜を得たものでした。

今回のシンポジウムの学問的な内容については世話人の鈴木利光先生からの詳しいまとめがある筈ですので、筆者は特にperipheralな事柄に関して独断と偏見の印象を述べてみます。

会場の有壬(ゆうじん)記念館は、新しい、キレイな建物で200人位の学会・研究会の会場に適していました。スライド装置や音響も良く、快適な勉強時間を過ごせました。グルメに知られた新潟の西洋料理屋イタリア軒が記念館の中に出張しており、その料理がでた懇親会は、質・量ともに充分なものでしたし、懇親会場は、学会に出席することの大きな目的である各研究者との打ち明けた討論の場として有効に使えました。

エスニックブームといわれ、ひたすら辛いものが異国的なのでしょうが、とっても辛いものを新潟で見つけました。“かんずり”という唐辛子の漬物です。1988年のNHK大河ドラマは、武田信玄ですから甲斐がブームの観光地となるでしょうが、信玄の人生のハイライトは、上杉謙信との川中島の決戦にあったと考えられます。すると、越後も再びブームになるような気がします。謙信が出陣に際し愛用していた強壯香辛料が、かんずりです。これは、唐辛子を雪中にさらし、自然薬味と糀で3～5年樽の中に漬け込んだものだと言明書に書いてあります。このかんずりを、湯豆腐や、鍋ものに薬味として耳搔き一杯ほどを取り皿に加えると料理の味が数段良くなるので、今冬から我が食卓の必需品となりました。

新潟の海の幸は、鮭、南蛮エビ、ズワイガニ等が有名ですが、今回は、ノドグロを知りました。新

湯では、タイ以上に珍重されている魚だそうで、実際、料理屋の品書きの中でタイや鮭よりも高い値がついていました。さらっとした脂がのった上品な白身です。調べてみるとアカムツが一般名でした。

そして、新潟は酒どころの名に恥じない醸酒が、越の寒梅をはじめたくさんありますが、筆者には鶴の友が最良でした。

今回の参加者が、100名と前回の約半分であったのは、開催地の遠隔性が最大の問題点ではないでしょうか？

このシンポジウムで、形態と産生物質から神経細胞の同定の方法が報告され、3カ月の練習で、中枢ニューロンの培養が行なえるようになり、さらに、NGFや癌遺伝子によって神経細胞の増殖の可能性が示された事は、Neuroscienceの今後の実り豊かな発展に培養の技法が直截に結びつくものだと感じています。今後もこのようなシンポジウムが本学会の活性化の為に必要であろうと考えます。

今回のシンポジウムの御世話をして頂いた鈴木利光、福田潤、加治和彦の各先生、及び興味深い講演をなされたシンポジストの先生方に、紙面を借りて改めて御礼を申し上げます。

§ 関連研究会報告

—器官形成研究会

（株）日本バイオマテリアル研究所 河村 健 司

器官形成研究会は、「細胞の集団としての、また生体の機能的・構造的の基本単位である器官と、器官形成に関心を持つ研究者が情報交換し、お互いの親睦を深めるための研究会」であり、その構成メンバーの専門は、医学、歯学、薬学、工学、理学、農学と多岐にわたっている。現在、器官形成研究会の会員数は二百名近くになっている。1年に3回の研究会が行なわれ、世話人により指名された講師が講演を行なっているが、次回より一般演題の募集も行なわれる予定であり、よりいっそう活発な討論の場を提供してくれることと期待される。

第9回器官形成研究会は去る12月12日（土）に東京都立大学理学部に於いて催された。

今回の研究会では2題の講演と2つのワークショップが組まれていた。各講演は、二人の演者により行なわれ、各ワークショップでは三人の演者による話題提供がなされた。

まず、講演・1「筋肉の器官形成」では、木村一郎氏（早大・人間科学・人間基礎）が、筋原細胞の培養におけるニワトリ胚抽出物中の細胞増殖因子の分離精製について講演された。次に大日方昂氏（千葉大・理・生物）が筋細胞の分化についての講演をされ、*in vitro*において*in vivo*に近い筋収縮系の構築が観察されたとの紹介をされた。

講演・2「血管の器官形成」では、まず、三井洋司氏（微工研・動植物細胞）が、血管平滑筋細胞と血管内皮細胞の長期継代培養における各種因子の作用を紹介された。また、松田武久氏（国立循環器病センター研）が、多孔性の高分子材料（セグメント化ポリウレタン）を人工基底膜としてその上に平滑筋細胞と内皮細胞を培養した血管壁の再構築モデルを紹介された。

ワークショップ・1「コラーゲンゲル培養法の現状と将来」では、まず、幸野健氏（大阪市大・医・皮膚科）が、3T3細胞のゲル内での増殖とゲル収縮に関して細胞分化との関連の話と、melanoma細胞のゲル内培養についての報告をされた。二番手として、三島弘氏（近畿大・医・眼科）が、

角膜実質細胞について話され、コラーゲンゲル内で培養することにより in vivo に近い形態をとるとの報告がなされた。三人目に、榎並淳平氏（独協医大・第一生理）が、コラーゲンゲルを用いた培養法と単層培養との比較を乳腺細胞培養を中心に紹介され、有効性、および将来性について問題点を提起された。

ワークショップ・2の「バイオマテリアル研究の現状と将来」では、まず、保田香織嬢（日立製作所）が、合成高分子電解質錯体を導入したシャーレ上に肝実質細胞を培養した報告をされた。次に森有一氏（テルモ・技術開発部）が、材料表面の性状により生体との interaction がどう変わるかについて抗血栓性材料を例にあげ紹介された。最後に、野一色泰晴氏（岡山大・医）が、生体の治癒力、順応性を利用し血管内皮を in vivo で、人工物表面に再構成させることに関して紹介された。これら一連の報告は、これまでの器官形成研究会では見られなかった材料、特に人工合成高分子材料を用いた材料側からの器官形成にたいしてアプローチを試みる研究の報告である。このように別な視点から器官形成を考えるということは、これからのこの研究会をより実りあるものにするものと考えられる。最初はたがいに戸惑うことも多いと思うが異なる分野のプロと情報を交換することは結構自分にとってプラスとなるものである。

以上、内容を簡単に紹介したが内容が濃く非常に有意義な研究会であった。また、昨今のバイオ研究の隆盛からか参加者も非常に多かった。この器官形成研究会が今後ますます発展することを望む一方で、いまの実験的な小回りの効いた活動体制をずっと維持してもらいたいと思う。

器官形成研究会連絡先

〒466 名古屋市昭和区舞鶴町65

名古屋大学医学部口腔外科教室

TEL(052)741-2111 (内2293)

会費	正会員	2,000円
	学生会員	1,000円
	賛助会員	30,000円

§ 新刊雑誌紹介——“Molecular carcinogenesis”

東大・医科研 黒木 登志夫

がん遺伝子の登場によってがん研究はすっかり様変わりしたように思える。今やすべての現象は遺伝子レベルで考えられ、実験が進められている。このような時代にあって分子生物学を指向した雑誌が次々に登場してきた。がん遺伝子の分野では“Oncogene”“Oncogene Research”などがすでに発行されているが、1988年からはここに紹介する“Molecular carcinogenesis”が出るようになった。編集責任者（Editors-in-Chief）は Thomas J. Slaga（テキサス大）と Stuart H. Yuspa（NCI）である。二人とも化学発がんの研究者であったので、内容はがん遺伝子にのみ留らず化学発がん、放射線発がん、細胞分化、増殖などの広い範囲のがん研究についての分子生物学に関するものになるであろう。また、この雑誌は迅速な出版を（どこまで守れるかどうか

は別として)目玉としている。副編集者(Associate Editor)には世界各国から22人が参加している。日本からは角永武夫博士(阪大・微研)と私が名を連ねている。論文投稿規定の必要な方は私までお問い合わせ下さい。なお、論文の投稿先は次の通りです。

Managing Editor

Molecular Carcinogenesis

University Texas System Cancer Center

1515 Holcombe Blvd, HMB 234 Houston Texas 77030 USA

§ ごじょうだんでしょう勝田先生 ——「勝田先生をしのぶ会」をしのんで——

藤田学園 丸野内 様

1985年春まだ浅い頃、私は独協医科大学組織培養研究センターに高岡先生を訪ねた。その4月から私は三菱化成生命科学研究所を辞し、藤田学園保健衛生大学へ赴任することになっていた。それまで細胞増殖の調節機構にしぼって行って来た研究から、興味ある細胞を選びその細胞における増殖と分化機能調節の研究への転換を秘かに決意していた。すなわち抽象的“細胞”から特定の具体的細胞に入り、そこを通して生物の謎へ踏み込んでみようと思っていた。さてその具体的細胞として何を選ぶか。私はマクロファージをとりあげてみようと思つて心づもりしていた。その相談もあって高岡先生を訪ねたのであった。何か起ると始まるいつもの行動パターンではあったが……。

知恵袋の高岡先生からは、期待たがわずいろいろな示唆を頂いた。その中にラット脾由来のRSP-2細胞株のことがあった。長年勝田、高岡両先生のお世話になりながら、私は不勉強にもなぜ先生方がマクロファージもいる脾臓の培養を手掛けられたか全く知らなかった。そこでおそるおそる聞いてみた。「勝田先生は、TD 40の中で抗体を作ろうと考えておられたのです。」私は「エッ」と言っ思わず心の中で「ごじょうだんでしょう勝田先生！」と叫んでしまった。

20年以上昔、抗体を作る細胞はどうも脾臓にいるらしいというので、染色により抗体産生細胞をチェックしながら培養を続け、その時の副産物の一つが、RSP-2であるという。

H. N. ClamanがX線照射したマウスを用いて抗体の生産には胸腺由来(T)細胞と骨髄由来(B)細胞とが必要であることを報告したのが1966年であり、G. KohlerとC. MilsteinがハイブリドーマについてNatureに発表したのが1975年である。今日私達がこれらの業績にいかにか大きく依存しているか全く計り知れない程である。そのことを思うと勝田先生はなんと大きな問題に立ち向かって来たことだろうと感慨新たなものがあった。

私が高岡先生とがん遺伝子発見の経緯について話をしていた時にも似たようなことがあった。勝田先生は、培養細胞の性質を変えるためにHeLa細胞から染色体を取り出して、培養中の細胞に食せようとされたのであった。今日でいうDNAトランスフェクションである。「20年早いですよ勝田先生！ほんとに！」

本年の日本組織培養学会第60回大会終了後、同じ駒場エミナースで“勝田先生をしのぶ会”が高岡

先生のお世話で催された。百十余名の参加による大変な盛況であった。研究者の外にガラスやさん、機械やさん、テレビやさん、本やさんなど実に多彩な顔ぶれで、没後7年今なおこれだけ多くの人々を引きつけるエネルギーを感じないわけにはいかなかった。

この様子を見ながら私は、日頃情報過多の流れにおされて忘れかけていた先生の姿——培養細胞をとし生物体の謎の本質にいどうとする姿を思い出していた。「培養をやってメンを食っていくには、おまえのライフワークにしようという大きいテーマと、積み重ねによってデーターの出る小さなテーマの2本立てでやりなさい。」という練習コース終了時に頂いた思いやりの深い言葉と共に……。

§ 編集後記

培養をばかりやっておられりゃおらが春、1988年明けましておめでとうございます。

さて、会員通信係最後の仕事です。めでたしめでたし。会員皆様がたのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。(K. M.)

昨年7月に「勝田先生をしのぶ会」が、高岡聡子先生のお世話で開かれました。丸野内先生原稿は前号にのせるはずでしたが、編集者の手違いで遅れたことをおわびします。

秋のシンポジウムの開催には賛否があるようですが、小浦先生原稿を読むと少なくとも地方で開かれるシンポジウムは賛成者が増えそう……。相棒はお屠蘇気分で、「最後の仕事」云々と言っていますが、3月にも出さなければならぬのを忘れないで！(N. H.)

§ 新入会員

氏名	現住所	所属機関・所在地
浅原茂雄		持田製薬㈱ *〒426 藤枝市源助 342 ☎0546-35-3211
石田貴文	〒484 犬山市塔野地大群 178-44 ☎0568-62-4827	京都大学豊長類研究所 *〒484 犬山市官林 ☎0568-61-2891
石浜久仁子	〒253 茅ヶ崎市松が丘 1-11-12 ☎0467-88-3981	北里大学医学部 *〒228 相模原市北里 1-15-1 ☎0427-78-8998
大原洋一郎	〒960 福島市春日町 12-32 ☎0245-34-2017	大原綜合病院小児外科 *〒960 福島市大町 8-11 ☎0245-22-8151
鎌田伸之	〒113 文京区本郷 3-24-3 石橋ビル 402号 ☎03-816-3956	東京医科歯科大学歯学部 *〒113 文京区湯島 1-5-45 ☎03-813-6111
菊永茂司	〒703 岡山市中島 75 ☎0862-75-5261	ノートルダム清心女子大学 *〒700 岡山市伊福町 2-16-9 ☎0862-52-1155
北澤利記	〒678-02赤穂市加里屋 102-6	アース製薬㈱ *〒678-01赤穂市坂越 3218 ☎07914-8-8001
小林迪弘	〒487 春日井市石尾台 5-10-16 ☎0568-92-9073	名古屋大学農学部 *〒484 名古屋市中千種区不老町 ☎052-781-5111
齋藤まり	〒243 厚木市温水 8-1 豊光マンション 305号 ☎0462-28-8842	(財)食品薬品安全センター薬野研究所 *〒257 薬野市落合 729-5 ☎0463-82-4751
島田貴	〒102 千代田区一番町 3-3 伊藤アパート ☎03-238-1388	東京慈恵会医科大学 *〒105 港区西新橋 3-25-8 ☎03-433-1111
鈴木眞一	〒960 福島市須川町 2-39 大橋マンション 404号 ☎0245-34-4379	福島県立医科大学附属病院 *〒960-12福島市光ヶ丘 1 ☎0245-48-2111
中島光業	〒146 大田区仲池上 2-10-16 池上寮 710号 ☎03-752-1782	森永乳業㈱生物科学研究所 *〒153 目黒区目黒 4-4-22 ☎03-711-2251
平岡利彦	〒321-02栃木県下都賀郡壬生町おもちゃ のまち 2-3-5 ☎0282-88-4538	獨協医科大学 *〒321-02栃木県下都賀郡壬生町大字北小林 880 ☎0282-86-1111

氏名	現住所	所属機関・所在地
星 宏 良	〒990 山形市城西町 5-10-5 ☎0236-43-7947	発生・生殖生物学研究所 *〒990 山形市城西町 5-34-5 ☎0236-44-5030
三 浦 由美子	〒250 小田原市寿町 5-3-28 瑞穂寮 ☎0465-34-6117	鑑紡織生化学研究所 *〒250 小田原市寿町 5-3-28 ☎0465-34-6111
森 田 初 恵	〒238 横浜市金沢区瀬戸 10-1-401 ☎045-701-0065	横浜市立大学木原生物学研究所 *〒232 横浜市南区中村町 2-120-3 ☎045-261-1757
守 屋 宏 毅	〒520-02 大津市堅田 2-1-3-82 ☎0775-73-5636	東洋紡績総合研究所 5B-1 *〒520-02 大津市堅田 2-1-1 ☎0775-73-2111
力 武 康 次	〒156 世田谷区松原 5-29-3 ☎03-327-3631	東京医科歯科大学歯科理工学第二 *〒113 文京区湯島 1-5-45 ☎03-813-6111

住所変更者

斎 藤 洋		東京大学薬学部 *〒113 文京区本郷 7-3-1 ☎03-812-2111
高 木 道 生	*〒321-02 栃木県下都賀郡壬生町緑町 2-17-13 ☎0282-86-3111	高木医院 〒125 葛飾区亀有 3-33-4 ☎03-601-2218
高 須 信 行		信州大学医学部 *〒390 松本市旭 3-1-1 ☎0263-35-4600
星 野 英 一	〒411 静岡県駿東郡町長泉町納米里 419-3 永井ハイツ 201	中外製薬御富士御殿場研究所 *〒412 御殿場市駒門 705-1 ☎0550-87-3411
森 順 一	〒274 船橋市二和西 1-6-5-305 ☎0474-47-9349	船橋商館筑波研究所 *〒300-26 つくば市要元弥平太向畑 204 ☎0298-64-3541
森 川 実	〒277 柏市東中新宿 4-1-2-105 ☎0471-73-9498	船東京免疫薬理研究所 *〒171 豊島区高田 3-41-8 ☎03-984-7900
猪 山 隆 正		福岡カリフォルニア歯科クリニック *〒824 行橋市宮市町 1-28 ☎09302-5-1333
山 岡 成 章	*〒227 横浜市緑区美しが丘 5-1-5-305 ☎045-902-4708	プラザ記念病院 〒227 横浜市緑区美しが丘 5-34-1 ☎045-903-0111

日本組織培養学会第61回大会

演題申込書 締め切り、昭和63年2月29日(月)

㊤

一般演題
演題名
演者名
所属・住所・TEL

必要なときはコピーを取って下さい。

参加申込書 (早めにお申し込み下さい)

㊤

氏名	懇親会(参加/不参加と記入)
1.	
2.	
3.	
4.	
5.	
所属・住所・TEL	

必要なときはコピーを取って下さい。

ホ テ ル	住 所	電話番号	宿泊料 (* 税込、B 朝食付)
* (1) 小田急センチュリー	府内町1-4-28	36-2777	* S 5500 (学会割引) * T 13900
* (2) 大分第一ホテル	府内町1-1-1	36-1388	* S 6000 (学会割引) T 8200-17500
* (3) 西鉄グランドホテル	舞鶴町1-4-35	36-1181	* S 7500(B)-8500(B) (学会割引) * T 1人 8500(B) 2人 15000(B) (学会割引)
(4) ワシントンホテル	都町2-1-7	34-8811	* S 5810-6950 * T 10450
(5) リーセントホテル	金池町1-9-1	37-1211	* S 5280 * T 9350
(6) 都イン	都町3-1-5	35-2525	S 4500-6000 T 10000-15000
(7) 法華クラブ	都町2-1-1	32-1121	* S 4500 * T 7000
(8) パークイン	中央町2-2-9	37-1221	* S 4500,4800 * T 8900
(9) ブラザホテル	末広町1-1-27	36-2988	* S 4300 * T 7000
(10) 第一オリエンタルホテル	府内町3-9-28	32-8238	* S 4200 * T 7000
(11) 第二オリエンタルホテル	末広町1-1-20	32-0131	* S 4200 * T 7000
(12) キャッスルホテル	府内町337	37-8878	* S 5500 * T 12000-15000